

前哲六無齋

龍屈讚詠

拾翠堂

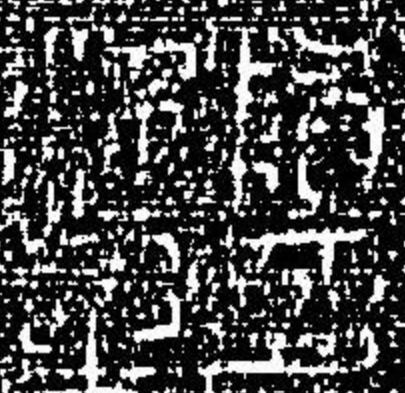
小英清息近如
何傳道戒王詐

何 一
傳 英
道 清
武 道
王 道
詠 如

Vertical text in a grid on the right page, likely bleed-through from the reverse side. The characters are faint and difficult to discern due to the high contrast of the scan.

力多取酒唯澆
子平墓在世间空
唱六季款
此偶思林子平事也

杏坪



海東山遊記

の巻なす

を

考た

このころの

見

愚問

...

おもひのきかたは...

かまふちよ...

かたは...

武士のこころの奥なる名は川なるにのまは埋はれり
 仰て天賦もうらみ仰てまゝ人言ふもやかく事なり
 我らとてせよ途なきは儲けの人の志も川の源
 中くよせの月未だおしとほふはしうまほはるはもの
 出りてあはれせよ逢ふは川の源なるにや
 せうあやと事、何れ権うらみ今も志ぬめは人なり
 是れ女やばあはれ道よけししては事あるはく柄こそんとは
 才流の場は縁なきはよるふらにせよやわりのよ
 志はたがふ言ふは柄はあはれしは枝をさぬ風は
 以ておひのふしかりにふしに上りてむうとあはれ及ぬや
 周旋こそは位はあはれりね奴才こそは終は芝生の露よ柄は然

和して

小川か壘を則

仕よの居まわりのやがてきつて来れまらむと云ふ付きまへ

又及

まを

小車比迎たいつて若ら川の例は徳の対し牙の信もせて

又新して

乃則

志の例はもの牙の志もまゐり大く志の信の例は

病の志はちうはまゝありて大に凡し

方初うもてまゝ本元手は書く

未始今年比歳也

去年つぎし有難者や何のまゝ

下し志の口は付て志の老のまゝ消ゆる故我おもひ

年月は病は床に下りては心は付てりは物も玉のまゝ

下し志の口は付て志の老のまゝ消ゆる故我おもひ

乃則

まを

非て

在列

園にほかに倍したるも天此後くら一白髪も今年七

積餘のつりぬり

蘇州にて旅の患は病にさしちあらぬ大罪

口角や平の喜はして病も病の疾又むして

初日なほ清くむとらぬのり言從行いさむしお為

あきあきさしきもつるが亦まは建つて久しうは

お母奈ちのけしけし

遊覧上りさるるをよめを掛る人の心も来を

千代羽見のさし

千代かりし書もあつた海のものたまたま

も止ぬぬは病も人のあはけをどの志の

さうの
ていごの如く
なまは天地人
をたのむ

兼て
おのれを
たのむ

亦し
おのれを
たのむ

もの
やを
たのむ

世中
の
もの

主と
し
た

身
を
たのむ

他人
の
もの

志
を
たのむ

あ
ら
ま
の
もの

お
の
れ
の
もの

夜
の
もの

凡多く客故今公友とせりさちりは並に存候所也

筆すて紙き心の書めてごつうのたまの頼申の旨 火

老翁が三お人沙うらみて平らさき心の鬼子可成いふ長生

あら人故うらむ涙流もせて余りさうりまかりははるか

開くるき運りさき運りせめて世もらさき一武士ならん

才技よせんさしちかきさうりせり人さく候とぞいふ

和

お別

うき沈む舟をさしさき運り候とぞいふ

思ひたれと云候も人の心之及んた

月七日の恐れに書くはちりいふ人目の間世を感心化む

別し沈むの舟を和らげ方なき 春葉式 天如明

沈むる舟と本知るぬと云候も唐多々いふのと遊子白あは

乃し

たのしみ

あつたふらふらなまの白とにせりしころのうらやま

いとほしきあつたふらふらなまのうらやま

すもろのうらやまのうらやま

我があつたふらふらなまのうらやま

あつたふらふらなまのうらやま

花のうらやまのうらやま

あつたふらふらなまのうらやま

あつたふらふらなまのうらやま

あつたふらふらなまのうらやま

あつたふらふらなまのうらやま

あつたふらふらなまのうらやま

無んとしてしよよ 杖杖のえいせい ひとのこころなるは

夢のれ方いらぬ けつつけらるる 夢のれ方いらぬ けつつけらるる

夢のれ方いらぬ けつつけらるる 夢のれ方いらぬ けつつけらるる

夢のれ方いらぬ けつつけらるる 夢のれ方いらぬ けつつけらるる

夢のれ方いらぬ けつつけらるる 夢のれ方いらぬ けつつけらるる

夢のれ方いらぬ けつつけらるる 夢のれ方いらぬ けつつけらるる

夢のれ方いらぬ けつつけらるる 夢のれ方いらぬ けつつけらるる

夢のれ方いらぬ けつつけらるる 夢のれ方いらぬ けつつけらるる

夢のれ方いらぬ けつつけらるる 夢のれ方いらぬ けつつけらるる

夢のれ方いらぬ けつつけらるる 夢のれ方いらぬ けつつけらるる

夢のれ方いらぬ けつつけらるる 夢のれ方いらぬ けつつけらるる

夢のれ方いらぬ けつつけらるる 夢のれ方いらぬ けつつけらるる

日本を以て其終くせしるを其の故に云ふ所とありて其の
さゆらりも亦四方の地は其もやいふ所は思ふも其らも世中

に収音きりて其の故に其の本を其の才以て其の山

社

乃則

よのすを其の故に其の才以て其の山を其の才以て其の山

又及

乃則

四方の地を以て其の故に其の才以て其の山を其の才以て其の山

又社

乃則

其の故に其の才以て其の山を其の才以て其の山を其の才以て其の山

其の故に其の才以て其の山を其の才以て其の山を其の才以て其の山

社

乃則

其の故に其の才以て其の山を其の才以て其の山を其の才以て其の山

時流し先你山波出てうらひにのたけく青をまきいふ
自り次て

叶成りて花はかくせしむるもたのむる人らに十まき

叶花をいひてかきむ物なつたて人上り花もせ上

花もあそ叶なる種もえ出て有るも花もくはな

花もあそこもあはれや秋の花に叶はるはまは天とて

も花もあ花もあつて葉もあつて葉もあつてのい

葉の葉はあつたはる南なく風のあまを松らうま

叶あつても葉の葉はあつたはる南なく風のあまを松らうま

叶中流らも花のむらぬ公の雲にさちれくもるあり

十年のいふ花もあつたはる南なく風のあまを松らうま

ぬらうちの葉はあつたはる南なく風のあまを松らうま

よきことのためにおもひがたけなすめまゝ人さへいんがしき七斗外
たてし後藤下之海川のおふ能まはつたこのせのなもつんて
ちびねみこをさかちやうくくくくわみ胸をさかちやうく
ちびねみこをさかちやうくくくくわみ胸をさかちやうく
ちびねみこをさかちやうくくくくわみ胸をさかちやうく
ちびねみこをさかちやうくくくくわみ胸をさかちやうく
ちびねみこをさかちやうくくくくわみ胸をさかちやうく
ちびねみこをさかちやうくくくくわみ胸をさかちやうく
ちびねみこをさかちやうくくくくわみ胸をさかちやうく
ちびねみこをさかちやうくくくくわみ胸をさかちやうく
ちびねみこをさかちやうくくくくわみ胸をさかちやうく

石部赤やう 祇園入

上 魚舟

題林子平蘇歌冊後

曉蟬變而蟬鳴蛻而飛音變者之龍
誦變而鯀人感變而下虬肅不諧變者之
日米利堅之啟天荒有走出之憤激音
唱撥夷天下心勢激此而幕府不能激

之於是內訌外侮尋者之人心呼而

王塗中興國是一變夷人訕外國請盟

不好而心懈慨唱孫甫者今則為開化

先生回心所天視者今則稱為同盟是

矣夫我夷人述也夫暑性寒來天地人

變也與鴻冬水人必變也天陰則集
天晴則一而飛鳥必變也有物於茲耳日
旱日死然人也而不免於木偶者終日
對之而無變換也昔晉靈公時孔子
入而陳桓弒君也宋治請伐之天武
會叱而人樂而三之不一也
黃勝明聖人觀時也張血孔子其也
而不過天下人交矣我志見之空真網
縹些陰而此萌者必林乎平耳亦其入
歌聞者感奮海國之談觀者驚異可

其鉅齊天人之節

神州之氣為之不振非先天之靈

而憂入耶謔曰雨降而北聖其詭也乎

火者通所外堅之半之江火盛夏之

不先其水其神以驚火者乃所以

火外也也通猶小也之變於復古

之變在開化在子齊一變至晉魯一

至道者人則使今之君子後天下

而樂各向之環其家者降而泐水

而可下之矣其不可決之孔子曰

宇柳下夷者未有若魯出馭居之魯子
然則今之開仁先生者概學之卒者非
耶會觀兵平山莊和歌冊子題所見
後

光緒二十五年五月三日

仙臺遠藤嘸吉

仙臺遠藤嘸吉

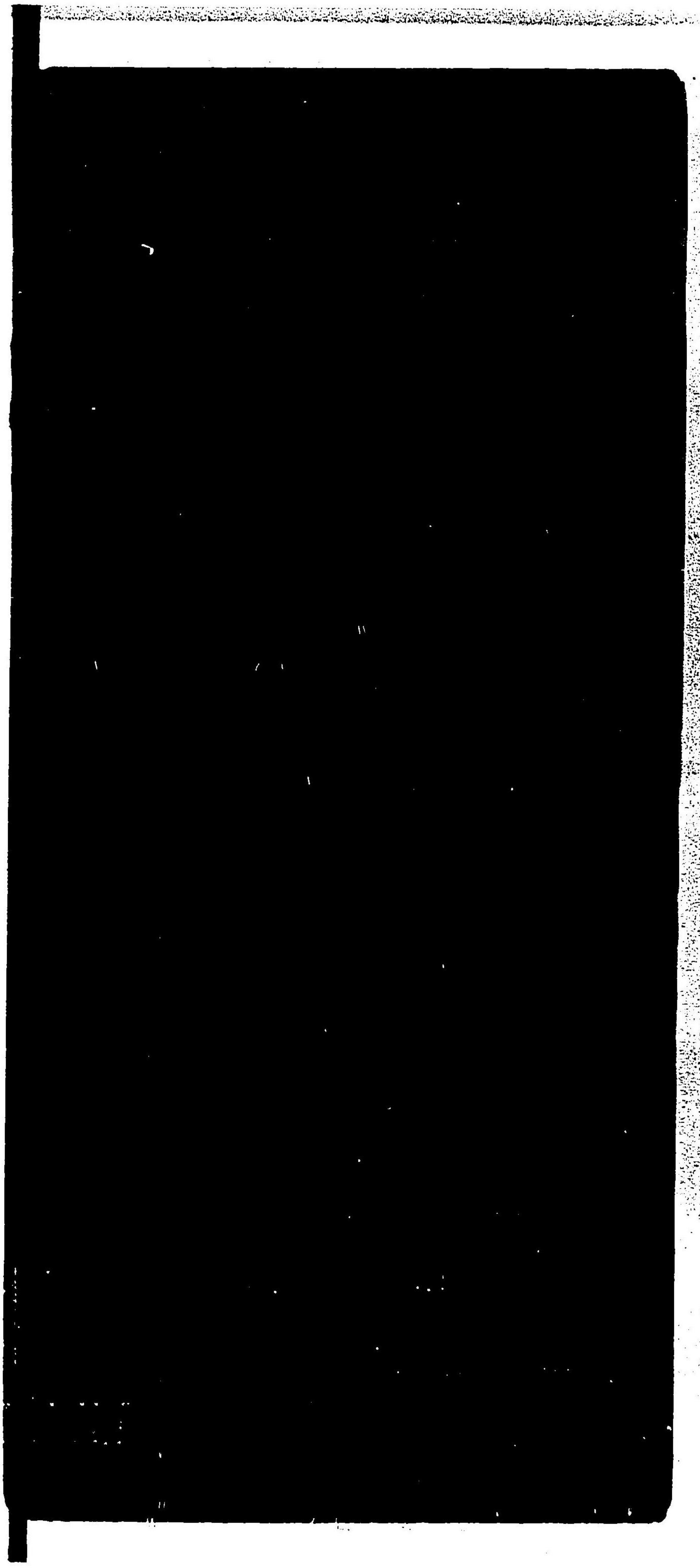
明治十年二月
六日御届

出版人

宮城縣第二大區小六區
仙臺花京院通九番地

伊藤寛平

定價五十錢



204626-000-2

203-45

六無齋先生和歌

林子平/書

M10

EDS-0345



203
45

東京圖書館				
203	45	文庫	和	門
版	號	架	面	知